# となりのホンドギツネ きみの町にもきっといる

渡邉　智之
（自然と人をつなぐ写真家）

アカギツネ *Vulpes vulpes* は北半球に広く分布しているが、日本には亜種であるキタキツネ *V. v. schrencki* が北海道に、ホンドギツネ *V. v. japonica* が本州以南（沖縄を覗く）に分布している。

どちらも人里近くにも生息しているが、キタキツネは人馴れした個体も多く、昼間に観光地などにも現れるため、生き物に興味がない方でも目にする機会が比較的多い。そのためか、日本にいるキツネはキタキツネしかいないと思っている方が非常に多い。

一方、ホンドギツネは同じように人里近くに暮らしていても警戒心が強く、人馴れした個体が少ない。また夜間を中心に活動するので、身近に暮らしていること自体に気が付いていないことが多い。

しかし、ホンドギツネの暮らしを直接観察していると、人の暮らしを非常によく注視していて、上手く利用していることがわかる。

例えば河川敷に作られたグラウンドや堤防の緑地など、人間が定期的に草狩りする場所を頻繁に利用する。岐阜県（特に濃尾平野）は木曽三川などの河川が多い環境であり、河川敷にグラウンドなどを整備し、利用していることがほとんどだ。そうした場所で夜間に観察するとキツネに出会う確立が非常に高い。

そのような場所は狩場や子育ての場、繁殖期には雄雌の出会いの場など、生活拠点としてとても重要な場所になっている。

キツネは狩りをする場合、足元から勢いよく飛び出したバッタやネズミなどを走って追いかけて捕まえることが多々ある。整備された場所は見通しが良く、走るのに邪魔になる障害物なども少ないので、獲物を追いかけやすい。なので河川敷のグラウンドなどは、キツネにとっては狩りをするのに非常に都合がいい環境なのだ。

また、河川敷には砂地の場所もあるが、キツネはそうした場所に巣穴を掘り、子育てをする。つまり岐阜はキツネにとって都合の良い狩場や子育ての場が多く揃っているのだ。そのためか、キツネに出会う頻度は他地域に比べて高く、個体数が多い地域のようだ。

最近では岐阜市の街なかや、名古屋市などの都市部でも目撃情報が増えており、これから彼らとどのように共存するかがより問われる時代になるだろう。そのためにまずは、彼らがどのように暮らし、人と関わっているのかをつぶさに観察する必要がある。

**講演者プロフィール**

1987年生まれ。ニコンカレッジ・名古屋校の講師も勤める。
人の身近に暮らしつつも多くの人が知らないキツネやタヌキなどの生態や人との関わりを撮影している。また自然と関わる養蜂などの生業やヘボ追いなどの文化も撮影対象。現代社会では見えにくい「自然とのつながり」を見える化することを目指し日々奮闘している。今年、文一総合出版から『きみの町にもきっといる。となりのホンドギツネ』を出版。

冬はホンドギツネの繁殖期。夜のグラウンドや堤防で雄雌が出会う。写真はケンカしている訳ではなく、「ギャギャギャ…！！」っと声を張り上げながら、求愛している様子。こうした行動が毎晩観察される。

河川敷のグラウンドに夕方に出てきて、子ギツネと遊ぶ雄ギツネ。グラウンドは子ギツネが走り回るのに最適な場所だ。キツネは哺乳類では珍しく、雄も子育てに積極的に参加し、遊んだり、食べものを与えたりする。